

イランを中心とした中東情勢 レバノン問題への対応に苦慮するイラン

財団法人日本エネルギー経済研究所
研究理事 田中 浩一郎

2006年9月21日
於：日本財団ビル8階会議室



田中 浩一郎(たなか・こういちろう)

財団法人日本エネルギー経済研究所 研究理事
中東研究センター・センター長
イラングループ・グループマネージャー

1985年東京外国語大学ペルシア語学科卒業、88年同大学院アジア第2言語修了。89年在イラン日本大使館専門調査員。92年財団法人中東経済研究所副主任研究員(後、主任研究員)。98年外務省国際情報局分析2課専門分析員。99年国際連合アフガニスタン特別ミッション政務官。2001年財団法人国際開発センター エネルギー・環境室主任研究員。04年財団法人中東経済研究所イラン・グループ主査兼主席研究員。05年日本エネルギー経済研究所中東研究センター・グループマネージャー、研究主幹、06年より現職。

【講演】

イランを取り巻く問題がいろいろなところで取りざたされています。なかでも核問題はいま最も注目を浴びています。今日は、核問題そのものを解説するのではなく、核問題に直面しながら他の問題にも対処しなければならないイランの状況に関してご説明申し上げたいと思います。

国際社会に対抗するためのイランの「カード」

イランはイスラム教シーア派を国教とする国です。まさに、宗教を政治と一体化させた、神権政治ともいえる政治システムを現在としています。

イランは国際社会、とりわけ米・欧から、核問題への対応を強く迫られています。一方、こういった圧力に抗するための手段やカードをイランは持っているか、あるいは国際社会側から見て、イランがこのようなカードを手中に秘めているので容易には物事を進めることができず、たじろがせる要因となるようなものがあります。そのカードが実際に有効であるかどうかは別にして、地政学的要因からエネルギー情勢に至るまでのカードをイランが抱えているわけです。(資料 1、13 ページ)

そのイランと他の国のシーア派、特にイラク、レバノン、アフガニスタンなどのシーア派とのつながりに加え、アメリカの言葉で言えばテロ組織である、ヒズブッラーやパレスチナのハマースなどとの緊密なつながりが常に指摘されてきました。

イランとレバノン・ヒズブッラーの切っても切れない関係

イランにとって、シーア派のつながり、特にレバノンのヒズブッラーは非常に重要な位置を占めています。もともと、イランのシーア派の法学者(聖職者)の名家のルーツをたどっていくと、レバノンとつながります。いまから 500 年ほど前、レバノンに住んでいた人々がイランに大量に呼び寄せられ、移住することによってイランのシーア派への宗派替えが支えられ、その関係上、血のつながりや縁戚関係が続いてきました。

隣国であるイラクに関して、サドルという名前を耳にすることが多いのです

が、イラクで暴れ回っているシーア派の急進派指導者、はねかえりのムクタダ・サドルもその一族ですし、レバノンで 1979 年まで活動していたイラン系の宗教学者ムーサ・サドルもやはりサドル家の出身です。また、先日日本を訪れたハータミ前大統領の夫人もサドル家の血を引く人で、イランの宗教界とサドル家、特にレバノンの系譜というのは切っても切れない関係にあります。

また、1970 年代、まだ PLO がレバノン国内に拠点を置いていたとき、のちのイランの革命の闘士となった人々がレバノンでパレスチナ組織との関係を築いていました。彼らは、革命が成就した際にイランに舞い戻り、イランの政権中枢に座ったわけです。

1980 年代にレバノンの内戦が激化した際には、レバノンの抵抗組織や、さまざまな宗派對立の中の 1 つの組織となったシーア派系のグループへのイランからの肩入れが発生します。当時イランの駐シリア大使だったモフタシャミープールという人物がレバノンで暗躍し、彼の有形、無形の指導によって今日のヒズブラーの土台が築かれました。

また、1980 年代にアメリカで大きな政治スキャンダルとなったイランゲート（イラン・コントラ事件）の余波で処刑されたメフディ・ハーシェミという人がいます。これもイランのはねかえり分子ですが、彼が活動したのもレバノンの地でした。（資料 2）

ヒズブラーの組織拡大に貢献したイラン

最近、ヒズブラーの組織拡大にイランはいろいろな形で貢献しているといわれています。イラン側は公式には、政治的な支援、モラル・サポートに過ぎないと言っていますが、資金、物資、軍事教練などの面でつながりがあるとみられています。

イラン・イスラム革命後、1980 年代前半のイスラム原理主義波及の最前線は実はレバノンであったとされています。なぜかというと、レバノンにはシーア派の組織があり、内戦で荒れていたということもあり、他の国に比べてイスラム体制をイラン以外の国に広げるための実験場として適していたわけです。また、イスラエルの軍事介入もあり、イスラエルとの戦いの最前線にも位置していました。

ヒズブラーに対するイランの関与がどのようなものであるのかを挙げたの

が資料 3 です。もちろんこの中には、実態として果たしてどこまで正しいのか追跡できないことも含まれます。

4 番目に挙げた「宗教的ガイダンス」というのはイラン側がある程度認めているものではありませんが、軍事教練や軍事顧問の派遣、年間で数億ドルにのぼるともいわれる資金援助、イラン製の武器などの調達・供与、こういったものについての真偽はなかなか突き止められていません。ただ、イラン側でも時折これを認めるかのような発言が出ます。

先ごろ、レバノンでヒズブッラーとイスラエル軍が対峙した際にも、かつてヒズブッラーの組織立ち上げに貢献したモフタシャミープール元大使がイラン側の報道に対して語ったことがいくつかあるのですが、その中で彼は「ヒズブッラーにはゼルゼリという地対地ロケットが備わっており、その射程距離は 250km ある」と言っています。こういったある程度長い射程を持つロケットをヒズブッラーに対して供与することができるのは、おそらくイラン以外にないであろうことを暗に示しているわけです。

また、イラン・イラク戦争中、つまり 1980 年から 1988 年の間に、レバノンのヒズブッラーの兵士が実はイラン軍とともにイラク相手に戦っており、そういった実戦経験を積んでいるからこそ今般の対イスラエル戦争でヒズブッラーは組織的な抵抗をすることができた、とも語っています。

戦闘に使われた兵器と使われなかった兵器から何が見えてくるか

今回の戦闘においてどのような兵器が使用されたのかについては、政治宣伝を含めていろいろな発言がなされています。実態をすべて追跡することは少なくとも私にはまだできません。ただし、大まかに見ると、古典的なカチューシャ・ロケットから始まり、いくつかの新兵器が今回登場しています。地対艦ミサイルの使用によって、レバノン沖で、イスラエルのミサイル艦を撃沈することはできませんでしたが、被弾させることはできたということは、かなりの驚きを持ってとらえられました。

また、いわゆる昔のバズーカ砲が洗練されたような、携行式の対戦車砲がイスラエルの地上部隊にかなりの打撃を与えたようです。さらに今回、在来型のカチューシャ・ロケットでは決して届くことがなかった地点までロケット弾が着弾しています。多分これまでのものとは違うロケットを使ったのでしょう。この 2 年ほど——おそらくこれもイランからの技術支援なり、何らかの供

与があったと思われるところですが——無人機(UAV)がイスラエル領内を飛行することがあり、今回それが1機撃墜されてもいます。(資料4)

一方、モフタシャミープール元大使が語った250 kmの射程を持つロケットが使用された形跡はありません。これが何を意味しているのかを考える必要があると思います。つまり、本当のところそのようなロケットを持っていないのか、あるいは仮に持っていたとしたらなぜそれを今回使っていないのかということです。

もともとヒズブッラーが保有していたロケットは、資料5に半円で描いた部分、つまりイスラエル北部の領域にしか到達しません。今回の戦闘では、そこからさらに南のクーラというところまでの射程が確認されていますが、そこまで250 kmもありません。この矛盾に対する解としてイランの危機管理術があります。

イランの危機管理術

イランの核問題を含めたさまざまな国際的問題に対してのふるまいを見ていると、3つのポイントがそこに介在しています(資料6)。

1 点目は、合理的に考えると、当面イラン疑惑があると思わせるほうがイランの国益にかなうということです。特に核問題については、疑惑が残っていてくれたほうが、イランに対する圧力を短期的にも中期的にも減じることができるという考え方です。

2 点目は、どのように疑われても、尻尾はつかまれないようにすることです。これは否定できる余地を常に残しておかなければいけないという配慮に通じます。仮にイラクやアフガニスタン、さらにはレバノンの事情により、イランが何らかの形で介入したとしても、物理的な証拠が敵方に落ちて、その責任をイランに持ち込まれるようなことがあってはならないわけです。

3 点目はむしろ、経済制裁を突きつけられている中での立ち回り方と言ってもいいかもしれませんが、決定的な孤立を避ける必要があるのです。それはまた、イランにとって都合の悪い事象を、イラン自ら証明しなければいけないような立場になることも避けるということです。イラクにおいてサダム・フセインが身を滅ぼすことになったように、大量破壊兵器がないということ、「ない」と主張している側がいかにかに立証するのか、このような状況をつくらないことがイランの国是でもあります。

ヒズブッラー作戦におけるイランのねらい

今回、なぜこのような事態に陥ったのかは明白です。ヒズブッラーがイスラエルに越境攻撃を仕掛け、イスラエル兵 2 名を拉致して連れ戻ったことから衝突に発展したわけです。ただし、その作戦、つまり拉致作戦自体にどのような意味があったのでしょうか。たとえば、イランが核問題から目をそらせるために、ちょっと離れたところに新たな火種をつくって、国際社会の関心がそちらに移るようにしたということが考えられます。7 月半ばというと、ちょうどイランに対して国際社会、とりわけ国連安全保障理事会の常任理事国がイランに対して提案した、いわゆる見返り提案の返答を迫っていた時期で、これに応じない場合には安保理を通じて制裁を科すということも発言していたわけです。

一方、ヒズブッラーが欧米とイスラエルに対してこれだけの抵抗能力を持っているという事実はすなわち、国際社会の圧力に対して、ヒズブッラーの後ろに控えるイランの軍事的な抵抗能力がさらに上をいくものであることを暗に示すための示威行動であったとも見られます。また、これはより政治的な目的ですが、レバノンのヒズブッラーが、パレスチナのハマスが行ったことと同じような拉致作戦を取ったことからみても、ハマスとの連帯を強化する意図があったと考えられます。さらには、これが本来の目的であるかもしれませんが、イスラエルで捕虜になっているレバノン人を解放するためのバーゲニング・チップを得ることです。

2 つの仮説——この作戦はイランに利益をもたらしたのか

これらはイラン、あるいはヒズブッラーに対して軍事行動を起こすことによるプラス要因をもたらすことになるわけですが、裏腹に、こういう行動を起こせば当然イランは地域の不安定要因としての咎めを受けることになります。ヒズブッラーが仮につぶされるような事態になったとすれば、イランはレバノンでの橋頭堡を失うような危機にも直面するわけです。

また、アメリカだけでなく多くの国が懸念していることですが、大量破壊兵器拡散の懸念が一層増幅されることになります。今回、通常兵器以外のものは使われていませんが、ブッシュ大統領がこの攻撃のあとに「もしイラン

が核兵器を持っていたらどうなっただろうか」と言ったように、ヒズブッラーなどにこういった危ない兵器が拡散していく疑念をも強めてしまうわけです。これを考えると、一方的にこのような作戦を取ったことによってイランとヒズブッラーが揃って利益を得たと考えるのは早計です。

そこで、2つの仮説を展開いたします。

まず第1の仮説(資料8)です。戦闘が止んだあとに、アラブ諸国民の間ではヒズブッラーはよくやったという支持が広がりました。ただし、レバノンにも、ヒズブッラーにも物理的な被害が及びました。それは決して軽いものではないという見方です。戦闘のきっかけとなった拉致事件を含めて、イランがヒズブッラーを全面的に支配してこのような行動に走らせたとなると、イランとヒズブッラーによるイスラエルの反撃の「読み違い」によって、レバノンとヒズブッラーは大規模な攻撃にさらされるという状況に陥りました。それはさらに、最前線に出てこないイランに対しての不满をヒズブッラーの内部で生じさせることとなります。ヒズブッラーはイランから供与された武器を使えたかもしれないけれども使わなかったということも考えられます。それは、イランにとって重要な、関与と責任を否定できる余地を常に残しておくという事情を優先することで成り立っている可能性があります。ヒズブッラーからすれば、自分たちが最前線で戦ったにもかかわらず、イランは自国の体面を気にして前線に出てこないということです。そうなりますと、イランは、ヒズブッラーからの批判を和らげ、関係修復のために、物心両面においてヒズブッラーに対する支援を強化する必要に迫られます。

仮説2(資料9)も、イランがヒズブッラーに対する支援を強化する、という結果は同じです。アラブ諸国民の間でヒズブッラー支持が広がったもののレバノン、ヒズブッラーそれぞれの損害が甚大だという点も同じです。ただし、出だしが違います。実はイランは拉致事件について関与も察知もしていなかったものと仮定します。ヒズブッラーの最高指導者ナスラッラー自身が、イスラエルがこれほど大きな反撃をすることは予想していなかったと認めています。もしそうなら、ヒズブッラー単体での責任ということになります。どの道であれ、レバノン国内でのヒズブッラーとその支援国イランに対しての見方は、非常に辛辣にならざるを得ません。そうなりますと、大事なヒズブッラーを擁護するために、イランはナスラッラー体制への支援を強化していく必要にかられるわけです。

結局、仮説1であろうと、2であろうと、イランは今後これまで以上の支援を

ヒズブッラーに対して続けなければいけなくなるということです。

費用対効果の高い作戦ではなかった

また、イラン国内では、この戦闘が行われている最中のレバノンに赴いて、イスラエルと戦うことを主張する、強硬派やハネカエリ集団の運動が活発化しました。彼らは志願兵となるか、あるいはより極端な攻撃手段としていわゆる自爆攻撃も辞さないとして、レバノンに渡ることを画策したわけです。しかし、彼らはことごとくイランからトルコに渡る国境で止められました。つまり、イランがレトリックの上でヒズブッラーに対する支援や連帯を謳っても、実際の行動ではそれを抑える政治というものがあります。建前と本音との間の差に対しての不満が強硬派の間で強まってきています。

今後イランがヒズブッラーに対してどのような形で関与していたとしても、あるいは仮にそれを止めたとしても、イランは国際社会から、より警戒感を持って見られることになり、問題視されるわけであり、また、特に湾岸アラブを含めたスンニ派世界の指導者たちは一様にヒズブッラーを非難する側に立ち、イランが背後にいるか、あるいはシーア派世界も覇権を目指すイランへの警戒心が高じる結果にもなっています。

しかし指導者層でヒズブッラーに対する非難が広がっても、現状で見るとヒズブッラーに対してのアラブ諸国での人気は高まっていますし、ともに同じような立場に置かれたヒズブッラーとハマスの間の連携も多少強まることになるかもしれません。

ただし、最終的に天秤にかけてみると、この作戦がイランによるものだったのか、ヒズブッラーの単独作戦であったのかを問わず、イランにとって費用対効果が高い作戦とは言えなかったし、むしろ相当に割高になった戦闘だった、という結論になるかと思います。

ご静聴、ありがとうございました。

【質疑応答】

○吉村作治評議員 イランにとっては、あらゆる面から費用対効果の高い作戦とは言えないという結論をお出しになっています。それでは、イスラエルにとってはどうだったのかをお聞かせいただけますか。

○田中 イスラエルの軍事作戦によって、ヒズブラーの攻撃能力はかなり打撃を受けています。その点では成功したと言えます。ただ、ご承知のように、奪取されたイスラエル兵2名を解放することはできませんでしたし、ヒズブラーを壊滅させることもできませんでした。

その一方、イスラエル国内で不満が高まっているように、イスラエル軍にも相当大きな被害が出ています。また、政治家が必ずしもしっかりしたビジョン、あるいは作戦を持って、ヒズブラーとの戦闘に臨んでいなかったのではないかと、という見方もあります。さらに、“Intelligence Failure”というか、ヒズブラーの戦闘能力に対しての情報収集に関してもかなり不備があったことも露呈しています。得たものがないわけではないと思いますが、痛み分けというか、イスラエルにとっても傷跡の大きい戦争になったと、少なくともいまのところ言えると思います。

○リチャード・ダイク評議員 大変複雑な問題をわかりやすくまとめていただき、ありがとうございます。

2、3点質問があります。1つはレバノンの隣のシリアは、私が知っている限りはスンニ派が多数派の国で、宗教原理主義な政権ではない。おそらく、彼らはヒズブラーやイラン系の原理主義が近づくことに恐怖感を持っているのではないかと思います。それはどう考えたらいいか。

もう1つ、私はアメリカ人ですが、ブッシュ政権にとっても、イスラエルの新しい政権にとっても、今回のヒズブラーの事件は失敗というか、大間違いではなかったのかという気がします。ブッシュ政権はシリアもイランも外交上は相手にしていない。だから外交政策の上から見ると立場がないという感じがします。

先ほどの田中さんの仮説にもありましたが、今回の戦いはある程度偶然のできごとで、それによってイランも、あるいは犠牲を払いながらもヒズブラーも、大変うまくやっている。イスラエルとアメリカは中近東政策で失敗の

連続だったが、今回もまた失敗だったという気がするのですが、どうお考えでしょうか。

○田中 まず、ご指摘のようにシリアはバース党の一党支配体制です。しかし、シリアの場合にはアラウィという少数派が、大体、指導層を押さえています。

アラウィ派は、シーア派の垂流のようなところがあり、その点ではシーア派とのつながりが無いわけではないのです。一方、アサド体制は世俗的なので、シーア派であろうと、あるいはスンニ派であれば余計にそうなのですが、原理主義勢力や復興主義が出てくれば確かに彼らにとって脅威になります。ただし、ヒズブッラーのようなシリアと関係のある団体であれば、その資金の移動や人の流れをシリア側で抑えることができますので、ある程度、そこはコントロールできるものだろうと考える次第です。換言すれば、シリアは原理主義そのものについては警戒していると思いますが、ヒズブッラーの動きにはそれほど心配していないのではないかというのが私の見方です。

次に、ブッシュ政権、またイスラエルのオルメルト政権の対応についてですが、イスラエルの軍事行動は別にしても、アメリカはシリアもイランも外交上相手にしないという現状下で、ある種八方ふさがりの状態を招いているという点では私も同感です。

その点、どこまで力を持つかは別にしても、アナン国連事務総長がこの事件の後イランを訪れ、レバノン復興とレバノン停戦に向けてのイラン側の協力を取り付けたことは、一定の評価を与えて然るべきだと思います。

3 点目、イランがうまく動いたという評価についてですが、多分イランにはそう思っている人もいるでしょう。ただし、先ほど申し上げたように、ヒズブッラーとの関係を見ると、いままでどちらかというあまり波風の立たないヒズブッラーとの関係の中に禍根を残すことになったのではないかと見ております。その点で、費用対効果を考えるとあまり良い結果になっていないのではないかと申し上げた次第です。

○広中和歌子評議員 私はユダヤ系の学校に留学しました。そして、多くの素晴らしいユダヤ系の人たちを知っています。同時にレバノンの学者なども知っています。非常に高い文化を持ち、たとえばレバノンの首都ベイルートは「中東のバリ」と言われたぐらい素晴らしかったわけでしょう。それが

破壊されてしまった、本当に心が痛みます。

中東に石油を依存しているという視点からだけではなく、我々は何もと何かできなかったのだろうか。これから先、どういう態度で日本は中東外交をやっていけばいいのか。もしご示唆があればいただければと思います。

○田中 大変に難しい課題だと思います。日本はヒズブッラーに対して影響力があるわけでもなく、仮にイランからヒズブッラーに対して指令が飛んでいたにしても、日本がイランに言いかせるほどの力を持っているわけでもありませんから、極めて限られた選択しかないと思います。イスラエルの過剰な反撃に際しても、もし唯一できたことがあったとすれば、ちょうど中東を訪問していた小泉首相がイスラエル首相との会談をキャンセルするという対応ぐらいでしょう。しかしこれは日本外交にとってかなり極端な舵取りになります。容易にそういう決断を下すことはできないと思います。

中東外交の将来について考えてみると、まずエネルギー問題に限らず、日本がこの地域に持つ権益や影響力はもともと限られていると思います。それに加え、この10年、あるいは15年余りの間に、日本のプレゼンスはますます低下してしまいました。1970年代、80年代の日本の経済成長期、あるいは言葉は悪いですが“Economic Animal”といわれたころの日本の経済的な勢いやプレゼンスが、バブル崩壊以後の「失われた10年」あるいは15年の間に低下してしまい、もはや中東において、日本の存在がまったく見えなくなってきました。それをこれから再構築していくことがまず求められるかと思います。

必ずしも対立軸として語る必要はないかもしれませんが、いま、中東各地における中国のプレゼンスは極めて大きいのです。10数年前は、イランでもどこでも、東洋人を見ると「日本人か」と聞かれることがほとんどでした。しかしいまはまず「中国人か」と聞かれます。それほどに日本のプレゼンス、日本人の活躍、が中東で見えなくなった。将来的に何かに向けて動くにしても、日本はこういう国である、日本はこういうところで活動しているということを、“show the flag”、旗を見せなければ、中東の動きに対応することも難しいのではないかと思います。

核問題に対するイランの“カード”

- イラク .. シーア派、クルド人、その他
- アフガニスタン .. シーア派、その他
- レバノン .. シーア派(ヒズブッラー)
- パレスチナ .. ハマース、イスラミック・ジハードなど
- 原油 .. 250万b/dの輸出実績
- ホルムズ海峡 .. 世界の原油の4割超が通過
- 天然ガス .. ロシアの資源外交に対するカウンターバランス
- 米国の対ロシア、対中国戦略がもたらす地政学的重要性

イラン、レバノン&ヒズブッラー

- シーア派法学者の名家のルーツを辿るとレバノンに通じる ⇨ サドル家の系譜
- 1970年代のレバノンにおけるPLOとチャンネルを築いた後のイラン革命の闘士たち
- 内戦下のレバノンで暗躍したイラン関係者
⇨ モフタシャミープール駐シリア大使、メフディ・ハーシェミ氏など
- ヒズブッラー組織拡大に対するイランの貢献
⇨ 資金、物資、教練など

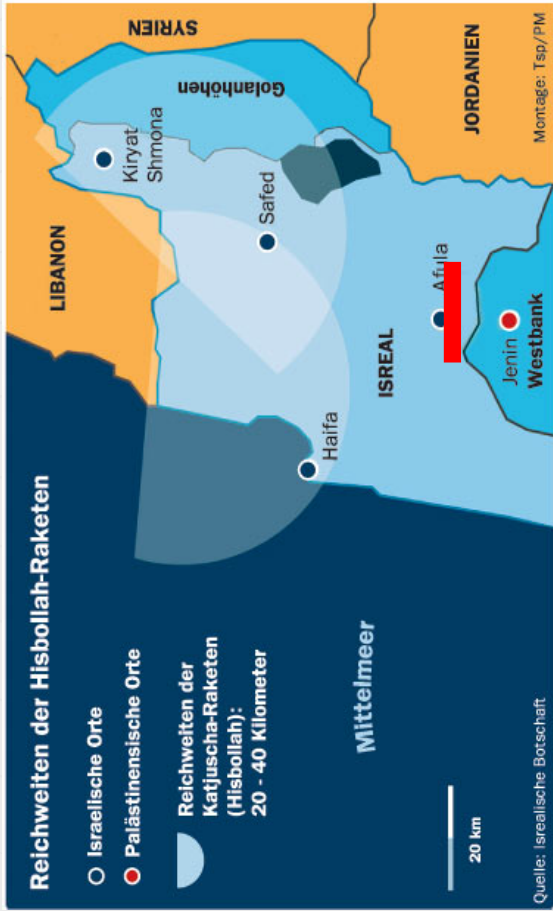
ヒズブッラーに対するイランの“関与”

- 戦闘員に対するレバノンおよびイランでの軍事教練の実施
- 南部レバノンへのIRGC軍事顧問の派遣
- 指導部に対する政治的・軍事的指令
- 宗教的ガイダンス
- 年間数億ドルに上る資金援助
- イラン製およびイランを通じた第三国製兵器の供与

使用兵器と未使用兵器

- カチューシャ・ロケット ⇨ イスラエル各地に着弾
- 地对艦ミサイル(C-802) ⇨ レバノン沖でイスラエル海軍ミサイル艦艇が被弾
- 携行式対戦車砲 ⇨ Merkava III戦車の装甲を貫通
- 飛距離70km超のロケット弾(Khaibar-1) ⇨ Afula周辺に着弾
- 無人機(UAV, Mohajer-4?) ⇨ 北部イスラエルで飛行中に撃墜
- 射程250kmの地对地ミサイル(Zelzali-2) ??

ヒズブツラー保有ロケットの射程



Der Tagesspiegel, July 17, 2006

イランの危機管理術

- 合理的な疑惑の維持
 - ・「持っていない」と軽んじられるよりも、「持っているかもしれない」と慎重に取り扱われることに重きを置く
- 否定能力の担保
 - ・仮に「外縁」に石を投じたとしても、その危機が自国に跳ね返ってはならない
- 決定的な孤立と立証責任の回避
 - ・イラクの轍を踏まないように対処

ヒズブッラーの作戦の背景を探る

- イラン核問題から関心をそらすための陽動
- 欧米とイスラエルに対する間接的な示威行動
- ハマースとの連帯強化
- レバノン人捕虜解放の達成
- 域内の不安定要因としての咎め
- レバノンでの橋頭堡消失の危機
- 大量破壊兵器拡散の懸念の増幅
 - ・「これでイランが核兵器を持っていたら…」ブッシュ大統領

仮説(1)

1. イランが拉致事件を含め、ヒズブッラーを全面的に指導し、支配した
2. イランとナスラッターの読み違いによってレバノンとヒズブッラーは大規模な軍事攻撃にさらされた
3. 最終的にアラブ諸国民の間で支持が広がったが、軍事衝突を通じたレバノンとヒズブッラー側の被害は甚大
4. 前面にも、前線にも出てこないイランに対する不満がヒズブッラー内部で高じる
5. 関係修復のため、イランは物心両面でヒズブッラーに対する支援を強化

仮説(2)

1. 発端となった拉致事件に関してイランは関知も察知もしていなかった
2. ナスラッターの読み違いによってレバノンとヒズブッラーは大規模な軍事攻撃にさらされた
3. 最終的にアラブ諸国民の間で支持が広がったが、軍事衝突を通じたレバノンとヒズブッラー側の被害は甚大
4. 被災を招いたヒズブッラーとその支援国イランに対するレバノン国内での不満は高じる
5. イランはヒズブッラーおよびナスラッターの立場を再構築するための支援を強化

結末とこれから

- イランはより多くの対ヒズブッラー支援と関与を求められる
- イラン国内で強硬派から政府の行動に対する疑問が強まる
- イランは国際社会でいままで以上に警戒され、問題視される
- イランに対する域内のスンニ派指導体制からの警戒が高じる
- ヒズブッラーに対するアラブ諸国民の人气が高まる
- ヒズブッラーとハマースの連携が多少強まる